

特集

三重への移住者

取材・文…中村真由美・中村元美・堀口裕世・中川絵美子
撮影…梅川紀彦・尾之内孝昭・中村元美
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

南北に長い三重県は、地域ごとに多彩な自然が広がり、食材も豊富です。加えて、独自の風土や伝統が今に受け継がれています。多様な魅力に惹かれて、県外からの移住者数は連続して前年を上回っています。

今回は、Uターン移住も含めて6組の方々をご紹介します。その暮らしぶりは、地域づくりにもつながっています。

取材協力…三重県地域連携部移住促進課

TEL 059-224-2420



「ののか」でいなべ市産食材の魅力と生産者の想いを届ける

川瀬知代さん・間芝勇輔さん「いなべ市北勢町」

「Y/Y」

昨年12月、北勢町^{（おほせ）}其原にアトリエショップ「Y/Y」がグランドオープンしました。オーナーは、川瀬知代さんと間芝勇輔さん夫婦。ともにイラストレーターとしても活躍する2人は、東京からの移住者です。

「私はいなべ市出身なので、いつかとは覚悟していましたが、東京では友人にも恵まれて楽しかったので、このまま帰らないかも…と思っていた」と、川瀬さん。



アトリエショップ「Y/Y」外観



展示販売されているアーティスト仲間作品



いなべ菓子「ののか」

決意したきっかけは、3年前の5月の里帰りだといいます。「ちょうど芽吹きの時で、山の緑が美しく、居心地がよかったのです」と笑顔で話してくれました。「どこにいても仕事や制作はできるから」と、京都出身の間芝さんの後押しもあり、同年10月に移住を実行したのです。

移住から2年の月日を経てオープンした「Y/Y」は、閑静な住宅地に建つ2階建て。2人が内装を手掛けた1階は

明るく開放的で、2人とアーティスト仲間たちの作品が展示販売されています。その中で見逃せないのが、いなべ菓子「ののか」です。料理研究家でもある川瀬さんが「できる限り多くのいなべ市産の食材を使って、その魅力を伝えるものを作りたい。生産者の想いや自然環境まで想像できるものを届けたい」という想いを込めて完成させました。蓋に描かれたイラストは、川瀬さんが中心となり、市内在住のデザイナーなどと共同で作成。美しい野山や草花を思い浮かべながら蓋を開けると、石樽茶^{（いしがらみ）}を使ったクッキー「煎茶」、豊かな風味の生姜^{（しょうが）}を練り込んだ「ちんすこう」、カヤの実を炒って砂糖をまぶした「かや糖衣かけ」など、10種類どれをいただいても味わい深く、食材の香りや味が優しく広がりました。なお、旬の食材を使用するため、内容は季節によって変化していくそうです。

お問い合わせ

「Y/Y」(水・木・金・土曜日営業)
TEL 0594-87-5553

幾つものつながりを通して
「大人が幸せになる町づくり」をめざす

野山 直人さん「名張市元町新町」

「イエノキ」「一般社団法人つなぐ」
FLAT BASE



向かって左から、北森 仁美さん、杉田 香乃さん、野山 直人さん

近鉄「名張駅」の西側、風情ある木造の家並みが続く辺り一帯は、旧町と呼び親しまれています。ここは、かつては名張藤堂家の城下町であると同時に、初瀬街道の宿場町でした。

平成26(2014)年、名張市内にUターン移住した野山直人さんが少年時代を過ごしたのも、旧町でした。当時はあちこちで子どもたちが遊ぶ姿が見られ、活気に満ちていたといいます。野山さんに移住までの経緯を伺うと、20代前半は大阪で楽しく過ごしていたものの、コンクリート製建物の施工図製作を手掛けているうちに「木の文化を知りたい」という想いが募ったと回想します。そこで奈良へと移り、木造建築の現場に触れた後、気付か

ないうちに原点である名張へ戻ってきたと話してくれました。



野山 直人さん

移住後、伊賀市のリフォーム専門工務店で技を磨いた後、32歳で独立。リフォーム専門の工務店「イエノキ」を設立した野山さんが取り組んだのは、空き家再生でした。実は、久しぶりに目にした旧町界隈は、子どもたちの姿もなく、空き家の多さに衝撃を受けたのだといいます。そんな時、築150年の空き家と出会い、「空き家を改修するのなら、若い世代と一緒にやりたい」と考えた野山さん。市の担当者との情報交換し、地域活性化に興味がある学生たちと、古民家改修のワークショップを開始しました。この体験は、学生たちにとっても新鮮で貴重なものでした。

「卒業後も空き家問題に関わりたい」と話すのは、学生たちの一人、杉田 香乃さんです。野山さんと杉田さんを含む

学生3人の理念が結実し、令和3年に「一般社団法人つなぐ」を設立。代表理事を務める野山さんの名刺には「まちと建物をつなぐ、まちと人をつなぐ、過去と未来をつなぐ」と記されています。

時を同じくして、新たな人との出会いがありました。昨年4月にオープンしたコワーキング×レンタルスペース「FLAT BASE」代表の北森 仁美さんです。実は北森さんは、元小学校教師。子どもたちの幸せを願って教師になつたものの、「まず大人が幸せでないと駄目では?」という疑問が生じ、「大人

の居場所づくり」を考えたといいます。この時、頭に浮かんだのが、長年空き家になっていた義母の実家でした。約100年分の思い出が詰まった町家が寂れていくのが気がかりだったのです。そこで、野山さんに相談。北森さんの想いを受け止めた野山さんや職人仲間の技が結集して、フルリノベーションされたのが「FLAT BASE」です。

小上がりのある1階では、ワークショップなども開催可能。2階には2部屋があり、会議や料理教室など、さまざまな用途に利用できます。畳部屋や小部屋

も用意されていて、「大人の秘密基地」のようです。

「まずは、大人たちが住んでよかったと思える町づくり。そして、子どもたちが育つてよかったと思える町づくりをめざしています」と明るい笑顔で語る、野山さん、北森さん、杉田さん。その挑戦は、始まったばかりです。

お問い合わせ

「FLAT BASE」(日・祝日定休)
TEL 080-7844-5175
「イエノキ」(日曜日定休)
TEL 0595-63-1120



今後について明るく語り合う3人



「FLAT BASE」外観



町家の趣が残る1階には、アットホームな雰囲気が漂う



多彩な用途に活用可能な2階

かね かわ ゆき お
金川 幸雄さん・浅奥 美穂さん 〔多気町丹生〕
「金川珈琲」



コーヒーを淹(い)れる金川さん。ドリップはじっくり時間を掛けて



金川さん(左)と浅奥さん(右)

和歌山別街道に沿って建つ、築135年の古民家。どっしりとした造りと、シックな趣を活かしてリノベーションされた明るいコーヒー店です。ここを営むのは、金川 幸雄さんとパートナー

の浅奥 美穂さん。平成30(2018)年、東京から三重に移住しました。

幸雄さんは、コーヒー専門店の3代目。祖父の英一さんがコーヒー豆販売の会社を開き、父の正道さんはブラジルまで

赴いてコーヒーのことを学んだというコーヒー一筋の家で育ち、ご自身も熱い思いを持っています。東京でお店を経営していましたが、「コーヒーを本当に美味しく提供できる場所」を求めて、全国を視野に探したと言います。

それまで縁のなかった三重県を選んだ理由は、「何となくしっくりとなじんだのです。調べるほどにこの土地が好きなになり、住んでいる人たちも謙虚で温かい人が多いと感じました」と幸雄さん。その後、三重県内で100か所近くの物件を見たとのこと。「この建物は、早い時期に参考にと見せてもらいました

が、文化財として保存する方向で考えていると聞いていたので、自分たちの店舗候補とは考えていませんでした。持ち主の方にお会いして、店にすることを勧めてもらっても、歴史のある建物に手を加えることを躊躇していました。でも、その方と不思議なほど急激に親しくなつて、『大丈夫』と強く勧めてもら

うちに、段々

自分でもそう思うようになっていったのです」と、巡り合いを語りま



リノベーションに携わった職人さんたちと(開店時に撮影)※

断すると、古民家を愛する再生のエキスパートたちが集結し、おしゃれで使い勝手の良い店と住まいができました。

「開店する前に、元の家主さんが近所のお宅を一軒一軒、一緒にあいさつに回ってくれたんです。皆さん温かく迎え入れてくれて、不安が消えていきしました。今でも、見守ってもらっているような気がしています」。良い出会いが次の良い出会いを生んで、令和2年、開店に至りました。今では常連さんも多数でき、地元の主要店となっています。



おじいさん譲りの焙煎機

玄関脇のガラス越しに、大きな機械が存在感を示しています。これは、祖父の代・昭和31(1956)年から使い続けている焙煎機。選り抜いた豆を、定休日の一週間分、この機械で焙煎します。「同じブレンドでも、焙煎の仕方でもまったく違う味わいになるんですよ」と、気温や湿度などを考慮し、種類ごとにそれに合う焙煎方法で…。香り高いコーヒーに加え、地元の菓子職人さんたちが「このコーヒーに合うように」と作ってくれているお菓子も人気。ゆったりと良い気分になれるコーヒー店です。

お問い合わせ

「金川珈琲」(水・木曜日定休)
TEL 0598-6718194



古民家の良さを活かしたシックな店内



金川珈琲の外観(昔は呉服屋)

佐藤 創さん

はじめ

【鳥羽市鳥羽】

「イエンスの塔」 「おにぎりカフェうさぎのしっぽ」



佐藤 創さん

んの映像アニメーションスタジオ「イエンスの塔」と「おにぎりカフェうさぎのしっぽ」があります。

佐藤さんは、東京都あきる野市出身。京都の芸術大学を卒業後、都内のテレビ番組制作会社に就職。CGアニメーターとして働いていました。いづれ独立を考えるなかで、過当競争にある東京ではなく、地方というこれまでと違うフィールドで、仕事がないところにつくりにいくことを考え始めます。そして「自分のスキルを活かしながら地域貢献ができる」地域おこし協力隊に興味を持ちます。さまざまな地域を調べる中で、移住フェアで偶然出会った鳥羽市のPRと職員の熱意が心に響き、担当課に相談。後日、佐藤さんのスキルを活か

せる「鳥羽暮らし魅力情報発信担当者」が公募され、無事採用されて、平成29（2017）年7月に鳥羽市へ移住しました。移住の一番の決め手は「人との出会い」でした。

任期中は鳥羽なかまちエリアの活性化を担当。PR映像やポスターの企画作成のほか、活性化イベント「なかまちマーケット」や移住定住係のサポートに取り組みしました。「当初、任期満了後はCGアニメーターとして起業を考えていました。しかし鳥羽市ではアニメよりも、実写の方が需要は高い。任期中は、地域のニーズを探り、仕事を通じて技術を磨く、独立へ向けた成長の期間になりました」。

昭和の街並みを残す鳥羽市なかまち（鳥羽3・4丁目）は、かつて「鳥羽の台所」と呼ばれ、近隣の漁師町や離島から訪れる多くの人で賑わいました。今では空き家が目立つこの通りに佐藤創さん



佐藤さんの造形作品



土日はおにぎりカフェとしても営業。移住者の女性が料理を提供し、佐藤さんも経営に携わる※

の制作依頼も多いのが現状です。しかし柔軟な対応をすることで、人づてに仕事をもらう機会も増えてきたそうです。

「鳥羽に来て一番

無事任期を終え、令和2年からは映像の仕事で独立。お世話になった鳥羽市なかまちに事務所を構えます。映像の仕事は事務所さえあればできますが、活性化に貢献したいという想いで空き家を購入。自身でリノベーションし、人が集うカフェを兼ねた店舗としてオープン

ンさせました。「内装のイメージを描き、壁面に木材を張り、床を塗り…空き家の改修工事は本当に大変でしたね」。使われていなかった部屋に動物が棲んでいたり、設備のトラブルが起こったりと課題は山積みでした。「地方の生活は、世間がイメージするほどスローな暮らしではありません。でも次々生まれる課題を解決していくことも楽しい」と語ります。また佐藤さんが扱う動画やデザインは、形ある商品ではないので、人によって仕事として認識されづらく、無料で



リノベーションのようす ※



個性的でおしゃれな店内

またそれらの活動に刺激を受け、近隣でも空き家を活用した店舗が生まれています。「自分の意思で地域に影響を及ぼせるのが楽しいですね」。これからも佐藤さんの挑戦は続きます。

お問い合わせ

「イエンスの塔」

TEL 0599-25-9005



事務所兼カフェの外観

本橋 洋一さん

【南伊勢町五ヶ所浦】

「サニーコーストカヤックス」



本橋 洋一さん。家族3人で南伊勢町に暮らす

南伊勢町の五ヶ所湾は、リアス海岸でとても穏やかな内海。「全国的に見てもシーカヤックをするにはとても恵まれたフィールドです。入口が狭くて、湾内

ヤックに適していた南伊勢町を、移住先として選びました。

本橋さんは埼玉県出身。カヤックを車に積んで国内各地を周り、カナダの

ユーコン川にも漕ぎに出掛けます。アウトドアメーカーにも勤務し、千葉や仙台、大阪などを転々とし、ノウハウを学び、経験を積みました。

平成21(2009)年にカヤックでの起業を決意します。まずはシーカヤックの師匠が運営する「パドルコースト」で、インストラクターとしての基本を学ぼうと伊勢志摩に移住。ツアーやイベントのヘルプとして修行します。4年を経て独立を考え、南伊勢町五ヶ所浦を拠点にしようと、物件を探しました。「近隣の不動産屋に出ている情報は保養所ばかりで一般住居がなく、当時はまだ空き家バンク制度もできていませんでした」。本橋さんは起業について相談をしていた商工会や町役場とのつながりから、現在の事務所の建物を紹介されました。「五ヶ所湾の海岸から徒歩1分のところにあり、浜辺に降りる扉も開閉自由という理想的な立地でした。また南伊勢町は漁業が盛んですが、ここでは養殖をやつてる人が多く、シーカヤック事業の

受け入れもスムーズでした」と話します。五ヶ所湾には途中で上陸できる場所がたくさんあり、無人の浜辺でのコーヒープレイクや打ち上げられた漂着物を集めてビーチコーミングを楽しんだり、気候に応じていろいろなツーリングコースが組めるとあって好評です。また南伊勢町は関西・中部圏からのアクセスもよく、遠方から訪れる人もいて、最近ではカヤックフィッシングが人気です。

更衣室やシャワールームも完備されているので、ガイド業務だけでなく、駐車場を含めた施設使用やカヤックを預

かる艇庫などの会員制度の運営、またカヤックをはじめパドルやライフジャケットなど関連商品の販売が収入源となっています。

南伊勢町は地域おこし協力隊も積極的に採用していますが、本橋さんはその制度の受け入れ事業者として協力しています。「3年間、スタッフとして勤めてくれたのですが、料理人でしたのでその特技を活かせるようカヤックツアーで料理やスイーツを選べるオプションの設定も作りました」。

地域には「助け合い」の文化が息つい

お問い合わせ

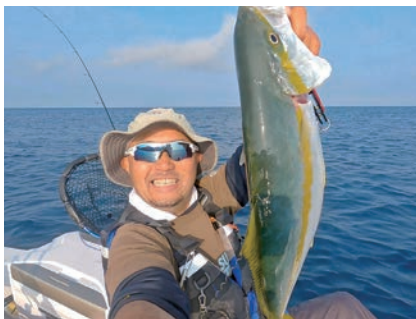
「サニーコーストカヤックス」(不定休)
TEL 05999-1661191919



広い敷地には休憩スペースも



五ヶ所湾でのツーリング ※



人気のカヤックフィッシング ※



カヤックの関連グッズを販売

自然豊かな土地を選び、
音響技術を地域で活かす

山本 創示さん（熊野市飛鳥町）

スタジオ
「Studio127」
いちにな



翻訳作業でパソコンに向かう

翻訳、グラフィックデザイン、音響と多彩な能力と技術を携え、フリーランスで活動する山本創示さん。「月曜から土曜の午前中はオンラインで翻訳の業務があるので、普段はパソコンの前にいる時間が長くて。在宅であれば仕事はどこでもできるのかな」と、移住した理由を話してくれました。山本さんは令和3年に実家のある大阪府から熊野市飛鳥町へやってきました。

それまで休日はいつも、海の見えるところなど自然の景色を求めてドライブに出かけ、和歌山県や三重県にもよく走っていたようです。3年前に、コロナ禍となったことでイベントなどが自粛され、音響の依頼が減り、その頃定期的な翻訳の仕事が決まります。一人暮らしを考え、思い切った

自然のある
田舎への移
住を決意し
ました。

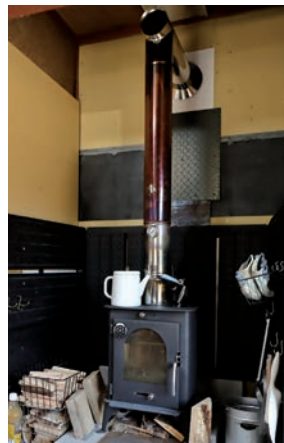
山本さん
は末っ子の



山本 創示さん

長男。移住するとしても両親の元へすぐ会いに行けるよう、大阪からそれほど遠くないエリアで探しはじめました。ネットで情報を集めるうちに、「熊野市空き家バンク」のホームページに辿り着きました。紹介が分かりやすく、問い合わせを送ってからの返事が早かったこと、それに対応してくれた担当者が関東からの移住者で、山本さんが不安に思っていたことに対して、経験者の視点で回答が丁寧で的確。何度かやり取りを重ねていく中で、熊野市へ移住する想いが固められていきました。

移住を決めた物件は築50年以上。床を張り直したり、間取りを変えたりと山本さん自身で改装しますが、地元の人でもボランティアで手伝ってくれたそうで



薪ストーブもDIYで設置

した。また各地のアーティストや音楽スタッフとつながっている山本さんは、依頼があれば出張にも出掛けています。が「今後はその人脈を活かして、熊野の方たちに喜んでいただけるような企画を考えています。この春には、プロデュースしているハーモニカ奏者の海人をイベントに呼びました」。

自宅横は家主の農地でしたが、そこを譲り受けることになり、無農薬での米作りに挑戦しています。「まさか農業をするとは思っていませんでしたが、スー

お問い合わせ

【Studio127】

studio127.net@gmail.com

祖母の代からクリスチャンの山本さんは、15歳でニュージーランドの高校へ単身留学。そこで写真とデザインを学び、帰国して大学では言語学を専攻します。再び4年生の時にシドニーへ派遣留学で渡豪。オーストラリアで通ったヒルソング・チャーチという教会で、音響技術を磨きます。熊野ではフラで地域を盛り上げる「ALOHANA（アロハナ）くまの」というイベントで音響を手伝い、実行委員会に加わって活動しま



イベントでの音響業務※



海人のCDジャケットをデザイン



玄関前に広がる田んぼ※